

「一緒に居てくれて嬉しいな」

毎週水曜日に開催している聖書研究祈祷会では、今、イザヤ書を読んでいます。だいたい毎週 1 章ずつ取り上げるペースで、A4 用紙一枚分に解説をまとめています。「旧約聖書に収録されているイザヤ書を 1 章ずつ読んでいる」という教会員と牧師の姿は、教会においては別に珍しくはなく、不思議でもありません。でも、ちょっと立ち止まって、私たちが日本語訳で読んでいる、この聖書のもともとの成立年代について思いを馳せてみると、なかなか立派なことをしているよね、と正直に思います。私たちは、先ほどの聖書朗読でさえ、今から 2000 年前の言葉を耳にしました。マタイによる福音書の成立年代は、だいたい紀元 1 世紀ごろです。聖書研究祈祷会でやっているイザヤ書は、そこから更に 700 年ほど時代を遡ります。日常的に、これだけ古い言葉に触れている人って、とても珍しいですよ。しかも、ただ読んでいるだけじゃなくて、その古い言葉から、生きるための知恵を聞き取ろうとし、さらに未来に向けたメッセージに耳を傾けようとしている。古い時代を懐かしんだり、羨ましく思ったり、歴史を研究したりするのではなくて、想いと心は新しい時代を見据えています。そんな風にして、知恵と知識と信仰を深める、私たちキリスト者って、もっと自信を持って、自らの営みに誇りを感じても良いように思います。私たちは、日々、聖書を通して学びを深めている。絶望しない方法を知り、それを机上の空論とせずに実践に移し、自分自身の幸せと、隣人の喜びをも期待して、毎週それぞれの場所へと派遣されていく。大事業は出来なくても、小さな親切と配慮を、主の御名によって行い、「受けるよりも与える方が幸いである」と言って、その身を献げることを厭わない。

キリスト教が最もその存在感を増すクリスマスを目前に控えて、私たちは自分たちが、神様によ

って特別に取り分けられた、尊いキリスト者であることを、ちょっと誇りにしてみたいと思います。

「私たちの大切な日を、一緒にお祝いしませんか？」って。あるいは、こっちから混じりに行くことがあっても良いと思います。「クリスマス、楽しんでますね、一緒にお祝いしてもいいですか？」と。「一緒にお祝いしませんか？」と「一緒にお祝いしてもいいですか？」と。ほとんど意味は同じですが、「あなたが私の方に来ればいい」という姿勢ではなくて、「あなたのところに私も行きたい」という態度を忘れないでいたいと思います。キリスト者としての自負と誇りをもって、沢山の人たちとクリスマスの喜びを分かち合えるように、残りのアドベントの期間、そんな心の準備もできたらいいですね。実際に、他所でのクリスマス祝会があるか、どうかは分かりませんが、心積もりとして、こっちから出向いていくこともあっても良いよね、ということです。

そもそも、クリスマスの出来事は、神様の御子が私たちのところに来てくれたことが始まりでした。天の上で御子が生まれたから、地上の者はみんな天に昇って来い、という筋書きであれば、早速、世の終わりの実現となっていたでしょう。信仰のある人、ない人。礼拝にいく人、いかない人。同じ宗教の人、よその宗教の人。その違いを物ともせず、イエス様は、この地上に降りて来てくださいました。「インマヌエル」「神は我々と共におられる」という名前を携えて、イエス様は、私たちの隣にいらっしゃったのです。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」。この 23 節の御言葉は、イザヤ書 7 章 14 節から引用されています。イザヤ書と言えば、さっき、ちょっと触れたように、イエス様が生まれた時代からさらに 700 年ほど遡ります。そんな古い時代から、「インマヌエル」「神は我々と共におられる」という希望であり、約束を語り伝え続けて来たんですね。そして、イエス様のお生まれによって、その希望と約束は叶えられた。クリスマスと言うのは、その成就を喜び祝うための祝祭です。キリスト教神学の立場から言えば、ですね。

しかし、「インマヌエル」という名前によって示されているクリスマスの喜びは、実は、誰も孤独ではない、という「一緒に居てくれて嬉しいな」という喜びなんじゃないでしょうか。神様が、イエス様が、聖霊が、そして、友人が、妻が、夫が、子どもが、孫が、一緒に居てくれて嬉しいな、という。イエス様のお父さんであるヨセフさんが、一度マリアさんと絶縁しようとして、天使の説得に応じて考えを改めたという話は、もうこのアドベント、クリスマスシーズンの定番エピソードです。その定番エピソードに、もう一つ新たな視点を加えるなら、ヨセフさんも、マリアさんも、別れずに一緒にいることになって良かったね、ってことです。「インマヌエル」という名前は、神様と人を結びつけるだけじゃなく、この夫婦の絆をも守ったと解釈することは、間違いではないでしょう。

そんな風に、人と人をつなぎ留める「インマヌエル」イエス様は、クリスマスという一大イベントを通して、日本各地で、様々な人間関係を、それこそ、恋人や友人や家族や教会などなどを特別な雰囲気の中で繋いでくれています。そのように集い、共に祝う中で、誰も改めて言葉にはしないでしょうが、「一緒に居てくれて嬉しいな」という温かな感情を抱きつつ、クリスマスを過ごしているんじゃないかな、と。私は、そこに「インマヌエル」イエス様と、神様の深い愛情を感じています。

どこまで手が伸ばせるのか分かりませんが、確かに、毎年のクリスマスを「一緒に居てくれて嬉しいな」という思いをもって迎えることのできない人たちもいます。それが、それぞれの宗教的確信の故であれば、お節介なことはできません。しかし、クリスマスを温かな気持ちで過ごしたいと思いつつ、そうできない人たちに、クリスマスの本家本元である教会は、どんなことが出来るのか、と考えてしまいます。もちろん「どなたでも教会にどうぞ」と言って回ることはできます。しかし、その言葉が届かないことの方が多いのは、私たちの良く知っているところです。「まあ、向こうか

ら来ないんじゃないか」と、ちょっと寂しく諦めることを毎年繰り返しています。もう、この繰り返しの関係は、祈るしかありませんよね。私たちは、十分に、この課題に対して心を砕いてきたかと思います。だから、「今年のクリスマス、イエス様を下さった神様に何を祈ろうか」。「・・・どうか、この寒い年の瀬、キリストの光が痛いくらいに輝くクリスマスに、一人も漏れることなく「一緒に居てくれて嬉しいな」と心を温かくすることができますように」。そう、世界の平和を祈るくらいの勢いで、クリスマスの喜びと楽しさが全ての人を包むようにと、祈りたいと思います。

そして、さっきも言ったように、「こちらへ是非どうぞ」という歓迎の想いと合わせて、「そちらへも出向きます」という積極的な気持ちも忘れずに。地上に降りて来てくださった御子イエス様のお姿に少しだけ倣うつもりで。このクリスマスの喜びが、ちょっとでもさらに広がり、ちょっとでもさらに深まりますように。祈りつつ、隣人への言葉と行動に移せたら良いのかなと思います。神様と、私たちの宣べ伝える働きが、より強まるアドベントを過ごすことができますように。最後にお祈りを致します。

神様。今日も私たちをこの礼拝堂に招いて下さり、ありがとうございます。アドベントの第2回目の礼拝を私たちはお捧げしています。あなたの御計らいによって、来るクリスマスは、広くお祝いされるようになりました。あなたの招きの広さに感謝しつつ、なお、寂しさや孤独の中で過ごしている方々のことを思います。どうか、誰もが温かな気持ちをもって、クリスマスの日を迎え、あなたの豊かな愛と慈しみを感じることができますように。キリスト教が古来大切に続けてきた隣人愛を、私たちも示し、周りを巻き込んで、大いにクリスマスをお祝いすることができますように。導いていてください。このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。